

化け物退治は スカートの中で

オリジナル版 KKKY
リライト版 大岡俊彦

地球滅亡をかけて、デートに急ぐ女のスカート
をめぐるコメディ

登場人物表

ミカ（20）

がさつな女子大生。

アラギ（29）

異世界からやってきた捜査官。

シバタ（21）

ミカのサークルの、イケメン先輩。

カゲ

モンスター。

ヨーコ（24）

アラギの妻。

シバタの友人

○回想、大学のサークル棟

シバタ(21)「無理」

ミカ(20)「えっ。なんで、ダメなんすか」

シバタ「正直、好みじゃないんで」

ミカ「は？」

ジャージ姿、髪ぼさぼさ、メイクもしてないミカ。

うっすらヒゲさえ生えている。

シバタ「フェミニンっていうか、控えめとい

うか、僕はそういう女の子が好きで。……

君、バーバリアンじゃん」

ミカ「……」

○回想、ミカの部屋

ミカ、雑誌やネットを見まくり、マネしまくる。

美容院や服屋に行き、どんどん女子っぽく変身していく。

ついに自撮りの媚び媚び写真をシバタに送る。

ミカ「ほんとにこんなんでもテんのかな……」

シバタのライン「いつの間にかかわいくなってる」

ミカのライン「デートしてください！」

シバタのライン「次の土曜の夜はどう？ ラ

イトアップのキレイなレストラン」

ライトアップされた建物の、ロマンチックな写真。

ミカ「っしゅあ！ オラオラ、来たー！ あ、そうじゃなくて、こう、しとやかな……上目遣いで……うふっ」

○現在、シャワーを浴びるミカ

おっさんみたいにガラリと戸を開けて髪を拭きながら出てくる。

えっちな黒の勝負パンツをおっさんみ

たいに履く。

ミカ 「勝——負！」

○ミカのアパートの外、夕方

時計を見ながら走って出てくるミカ。
女の子っぽいミニスカート。

ミカ 「やっべえ遅刻遅刻！」

物陰に潜む、黒い体に赤い目をした化け物、カゲが、彼女のミニスカートの中に入り込む。

ミカ 「ん？ 何？」

もぞもぞとするが、何もわからない。
再び走り出そうとした瞬間、走ってきた男、アラギ（29）とぶつかる。

ミカ 「いった！ てめえどこに目つけて：
：あ、違う、ごめんなさい、痛くないです
すか？ 大丈夫？」

アラギ、小さな探知機をミカに向ける。
ピーピー音が鳴る。

ミカ 「？」

探知機をスカートに向けた瞬間、音は速く大きくなる。

アラギ 「御免！」

アラギ、ミカのスカートをめくろうとする。

しかしミカは本能で逃げる。

ミカ 「はあ？ 何すんだよオッサン！」

アラギ 「すまん。私の名はアラギ。君のスカートをめくらないと、地球は滅亡する」

ミカ 「は？」

○タイトル「化け物退治はスカートの中で」

○同、つづき

アラギ「つまり、私は別のパラレルワールドから来た人間だ。そこにカゲという怪物が生まれ、私たちの世界は滅亡の危機に瀕している。ところが次元転移装置が発明され、

カゲはそれを使って別の次元——つまり君の住むこの地球にやって来たんだ。この水際でカゲを退治しないと、この世界でカゲは増殖し始める」

アラギはスカートの中に手を伸ばすが、ミカは避ける。

ミカ 「頭おかしいんじゃないの？ それとスカートめくりと何の関係があんのよ！」

アラギ 「カゲは陰湿を好む。その……君のそこは暗くじめじめして……」

ミカ 「ふざけんな！ 失礼にも程がある！」

ミカ、怒って歩き出す。
アラギ、追いかける。

○公園、夕方

公園の中をショートカットしようとするミカ。追いついたアラギ。

アラギ 「これを見れば信じるか」

スマホのようなものを見せる。

× × ×

アラギの声 「ヨーコ！ ヨーコ！ なんてこんなことに！」

次元転移装置の前で、アラギの妻ヨーコ（24）が惨殺されている。

殺したのはカゲ。出力をマックスに。装置が火を吹く。

アラギにやりと笑うカゲ。次元転移して消える。

あとに残されたのは燃え盛る装置と妻の死体。

× × ×

アラギ 「私の妻は科学者だった。次元転移装置の開発者だ。カゲはそれをどこから聞きだし、妻を殺し、我々に追ってこれないようにした」

ミカ 「……」

アラギ 「彼女の残した設計図から5年かけて転移装置を作り直した。毎日この動画を見ながらだ。やつの発するイプシロン波を追

って、やっとここまでたどり着いたんだ。
そしてそれは、君のそこから発せられている
(スカート指す)

ミカ 「……ここに、そいつが？」

アラギ 「やつは姿を大きくも小さくもできる
んだ」

スカートをめくろうとするが、やはり
避けられる。

アラギ 「まだ信じないのか！」

ミカ 「信じられるわけないでしょ。変態の
オッサンかもしれないじゃん！」

アラギ 「……」

懐からブラスターを取り出す。

電柱に向ける。カラスが止まっている。
照準をカラスから外し、電柱のてっぺ
んに向けて撃つ。

電柱のてっぺんは空間ごと消えた。カ
ラスは驚いて逃げる。

ミカ 「え……何それ」

アラギ 「空間削除ブラスター。これでやつを
消失させる」

と、スカートに向ける。

ミカ 「ちよつと！ 私の下半身ごとなくな
っちゃうじゃん！」

アラギ 「だからそこに潜むやつを追い出すん
だ！ おとなしくスカートの中を見せなさ
い！」

ミカ 「いやよ！」

アラギ 「なんでだよ！」

ミカ 「スカートの中覗かれてうれしい女が
いるわけないでしょ！」

アラギ、飛びつく。ミカ、避ける。

アラギ、飛びつく。ミカ、避ける。

アラギ 「あ」

と別の方向に注意を向けて飛びつく。
ミカ、避ける。

アラギ 「……」

ミカ 「……」

アラギ、寝転がってあおむけになる。

アラギ 「チェンジロケット！」

背中からローラーが出てきて、ロケット噴射。

寝転がった体勢のまま、スカートの下まで来る。

ミカ、スカートを両手で覆い、アラギの顔をふんづける。

ミカ 「私が中身を見せないとどうなんのよ？
地球が滅亡するってどういうこと？」

アラギ 「カゲは増殖し、この世界を闇で覆いつくすんだ。もうすぐ夜だろう。そうしたら終わりなんだ。おそらく……君の下着は黒だな」

ミカ 「なんでわかるのよ！」

アラギ 「白やピンクなら、そこにはいない」

ミカ 「……」

アラギ 「おいカゲ！ 出てこい！ さもなければ宿主のこの女ごと空間削除するぞ！
(ブラスターを向ける)」

目をつぶるミカ。ためらうアラギ。

アラギ 「そうだ！ チェンジフラッシュ！」

探知機が変形して、フラッシュつきのカメラに。

アラギ 「スカートの下からフラッシュを焚けば、やつは光を嫌って逃げ出す！」

下からカメラを構えようとするアラギ。

ミカ 「変態にも程があるわ！」

アラギ 「……」

ミカ 「……私、絶対見られたくないの」

アラギ 「なんでだ！」

ミカ 「ネットで買った『絶対男を落とせるえっちな下着』だから」

アラギ 「はあ？」

ミカ 「アンタを落としちゃう」

アラギ 「そんなの嘘に決まってるだろ！」

ミカ 「そんな！ 三万円もしたのに！」

アラギ 「ぼったくりじゃねえか！」

ミカ 「うっさいわ！」

アラギ 「……」

ミカ 「……」

アラギ「よし、わかった。ではパンツを脱ぎなさい」

ミカ「はあ？」
アラギ「カゲの取り憑いたのは、おそらくパ
ンツだ。こっちによこせ。あるいは脱いで、
そっちへ投げ捨てろ」

ミカ「変態！」
アラギ「くそう。…あ、これなら！ チェ
ンジ・ミラー・アンド・ファン！」

探知機が変形して扇風機になる。スマ
ホは手鏡に。

アラギ「風で偶然スカートがめくれた。そし
て俺は見えない。鏡越しだ。これなら恥ずか
しくないだろう」

後ろを向き、手鏡越しに話しかけ、扇
風機が回り始める。

ミカ「どうしてそんなにド変態ばかり思い
つくの！」

ミカ、走って逃げだす。

アラギ「待ちなさい！」

○日没

○おしやれなショッピングモール前、日没

二人、走りながら。

ミカ「そもそも今日は、私の人生がかかっ
たデートなんだから！」

アラギ「それと地球滅亡と、どっちが大事
だ！」

ミカ「ていうか、ついてこないで！」

○ショッピングモール、噴水前、夜

待っているシバタ。

ミカ、慌てて女子っぽく走って手を振
ろうとする。

と、シバタの友人たちが。

ミカ「？」

思わず柱の陰に隠れるミカ。

友人 「なんでミカとデートなんだよ。ブスとかバーバリアンとか言ってたじゃん」
シバタ 「カワイイは作れるんだよ。これ見ろよ（とスマホを見せる）」

友人 「まじか。こんなに女って変わるんか」
シバタ 「やれたらラッキーって思ってた」

友人 「イケメンはすぐやれていいよな」

シバタ 「すぐお前らにも回してやるよ。どうせ中身はブスだし、外見で嘘ついてるんだぜこの女」

ミカ 「……」

柱の陰から姿を現す。

ミカ 「私、やっぱりブスなのね」

シバタ 「え？ 何？ いたの？」

ミカ 「全部聞いちゃった。そんな風に思ってたなんて」

シバタ 「えつと……あの……冗談だよ、冗談！ 照れ隠しだよ！ サヤカが好きだってこと……」

ミカ 「私の名前はミカ。それすら覚えてない癖に」

ミカ、シバタに背を向け、走り出す。

柱の陰から見えていたアラギ。

ミカ 「いいよ。スカートの中見ても」

アラギ 「……これはご愁傷様というか、なんというか……」

ミカ 「いいからさっさとスカートめくれ

よ！ 化け物退治してえんだろ！ そこに膝まづけや！」

アラギ膝まづくと、ミカはスカートを彼の頭にかぶせる。

ミカ 「どうだ！ 満足か！ いたか化け物は！」

アラギ 「わからん！ 暗くてわからん！」

その時、時刻が19時ちょうどになる。音楽とともにライトアップが派手に点灯。

アラギ 「あ！」

スカートの中に強烈なライトの光。それを嫌って、カゲがパンツから逃げだ

す。

アラギ「いまだ！」

アラギ、かっこよく横転し、空間削除
ブラスターを撃つ。

カゲに命中して、周囲の空間ごと消失
させる。

周囲の人々、シバタや友人も含め、何
が起きているかわからない。

アラギ「……これでこの世界は救われた。御
協力、感謝する」

アラギ、握手を求める。

ミカ「……」

アラギ「何？」

ミカ「私のパンツ、見たでしょ」

アラギ「見てない。見たとしても職務上の機
密につき……」

ミカ「ブスじゃなかった？」

アラギ「この世界のことはよく分らないが、
私の世界では女はあまり自分を隠さないほ
うが魅力的だと言われている。レースで黒
いバラのパンツはセクシーだから、どんど
ん見せるべきだ」

ミカ「やっぱ見たんじゃん！」

思わず腹に蹴りを入れる。

アラギ「……（驚いたような顔）」

ミカ「なに？」

アラギ「私の死んだ妻と同じだ。なんと自由
闊達な魅力にあふれた人なんだ。私は君に
惚れた。是非ラインを交換してくれないか」

ミカ「はあ？」

ライトアップはラブラブな音楽になり、
噴水が噴き出す。